

優良農家の紹介

「上郡土地利用型農業研究会」の取組

はじめに

「上郡土地利用型農業研究会」(会長・三輪幸生)の歴史は、1985年1月、水稻を中心に大規模経営に取り組む農家6戸が、お互いの技術研鑽や情報交換による経営の安定を目的に、県下にさきがけて「赤穂地区土地利用型大規模農業研究会」を設立したことに始まる。その後、1999年に名称を「上郡土地利用型農業研究会」に改め、現在会員数は15名である。

キャラクター豊富な会員

当研究会の会員はキャラクターが豊富であり、満80歳にして新品のトラクターを購入したK氏。仕事にも日頃の言動にもパワーが溢れ、散弾銃クレー射撃の元全日本選手権チャンピオンであるS氏。さらに、英語がペラペラ、農業者の国際交流にも力を入れるI氏。この他にも大物キャラクターが続々と登場するのがこの研究会である。

意欲のある者を後継者に

大規模農家にとって、後継者を確保するという事は非常に重要な問題である。当研究会においても色々な後継者対策がとられている。従業員に経営技術を教え後継者へ育成するケース。娘婿が脱サラし後継者となるケース。娘の彼氏が脱サラし従業員から後継者へと移行するケース。いずれのケースも息子はいるが、他産業に従事するなど農業の後を継ぐ可能性は低い。「自分の後は意欲のある者がやれば良い」の言葉に、理にかなった経営感覚を感じる。

研究会活動と仲間づくり

当研究会は、ほ場巡回研究会や研修会などを年間に4～5回開催している。そして、研修会終了後は必ず懇親会を開き、夫婦同伴、後継者同伴、従業員同伴で親睦を深めている。懇親会では、日頃の悩み

や疑問に感じている事の相談、経営に対する意見交換などにより、お互いの理解や仲間意識が深まり、結束力や活力を生み出す源となっている。

新たな研究会活動の展開

土壌分析結果によると当地域は、腐植含量が低い。米生産過剰により価格上昇が難しい中で、経営安定には土づくりによる収量向上と品質安定に挑むことが必要である。そこで、相生市内で研究会会員2戸と酪農家1戸で構成する土づくり組合が2006年度に発足し、新たな堆肥舎も整備して、2007度秋から本格的な堆肥散布が始まる。

また、色彩選別機の導入による米の品質確保への取組も会員内で広がりつつある。

今後への期待

2007年度から「経営所得安定対策等大綱」に基づき、新たな担い手施策が展開されている。今後、農会や営農組織等との連携も模索しつつ、新しい地域農業のモデルとなる活動が期待される。

岸根 秀明(上郡農業改良普及センター)
(問い合わせ先 電話:0791-58-2100(代))



図 水稻ほ場巡回の様子

ひょうごの農林水産技術 No.154

平成19年11月1日(隔月刊)

兵庫県立農林水産技術総合センター(0790)47-2400